

だ北方の蒙古時代の洞窟に在つた間に既に書き加へられて、それが後にこの書窟に移されたものか、搬入の事實に疑ないとしても、その年月の知り得ない今日では何とも定め難い。何れにしても大して重要な事柄ではないが、ただしかし種々の奥書が多くの文書の中に存して、しかも此の例の如く何人にも注意されず、他日その発見によつて、萬一にも書窟閉鎖の時代に關する從來の最も信すべき學説を覆す日の、必ずしも無きを保し難いと考へる。

さて此等の回鶻本の移入のことを、ペリオ、スタイン兩氏と共に認めるにしても此の實義疏書寫の年代を定める上には、疑問は依然として疑問である。至正十年の日附を有する佛書は、紙質としては黄紙の厚手であるのに、これは白色紙の薄手で、兩者全く相違して居る。かゝる相違は、此等の書物がその蒙古時代の洞窟中に在つた時から既に互に時代來歴等を異にしてゐたものであつた事を示すものかとも思はしめる。併しながらそれにも拘らず、此等の兩者の間には著しい類似があつて、之をほと同時代のものと考へしむるに於て、充分なるものがあると思ふ。

著しい類似といふのは、第一にはその回鶻文字の書風の類似であつて、これは、兩者を少しく注意して見る何人にも、直ちに觀取し得られることである。第二には Ch. XIX, 003 即ち至正十年の佛典にも、第四十六枚裏と、第五十八枚裏との二箇所に漢字が見え、前者には「善哉善哉」、後者には「善哉、了也、娑土、了也」と記されて居るが、此等の漢字は實義疏の殘簡四種の諸所に見ゆる同一文句の文字と酷似すること、同一人の筆蹟かとまで思はしむるものがある。第三には至正十年の佛典の第四十六枚表の末行、即ち右端の行に (Serindia, Plate CLXV 上段參看) 回鶻文字に非ざる奇怪な殊字が見えるが、之と全く同一の文字が Ch. XIX, 001, 第八十六枚表及び、Ch. XIX, 001b (寫眞第三參看) に於て認められる事である。自分は此の文字を以て、實義疏卷第四 (Ch. XIX, 002)